

東淀川区の大阪市営住宅に引っ越して二年になった。

新しい土地と住まいにもなれて毎日を過ごしている。この場所は大阪市内とはいえ、その端に位置している。近くを流れる神崎川にかかっている江口橋を渡れば摂津市である。繁華街がある市の中心部と異なり、のどかな風景がひろがっている。団地の真下には畑があつて、遠景には山並みがある。

集合住宅が多い場所である。〇〇団地、××団地と巨大な四角いコンクリートの箱が並んでいる。新しく建造された建物はほとんどなく、築数十年という古いものが多い。なかには、すでに住む人もいなくなつて、廃墟となつたものも見受けられる。カラスやハトが飛び交っている。

商店も少ない、というよりほとんどない。錆びたシャッター扉の上にかげられた色褪せた看板の文字を読むと、かつてそこが何らかの店であつたことがわかる。

個人商店はないが、スーパーはある。おそらく一帯の団地の住人をお客様の対象に見込んで進出したのだろう。

「ここいらは、どんどん寂れてきていますよ」

同じ団地の階下に四十年以上前から住んでいるという年配の人が言っていた。

「昔は、もっと活気のある町だったのですが」

その人の言う通り、私が転居してきてからも、喫茶店とカレー屋が閉店した。内科や耳鼻咽喉科の医院でなくなつてしまつたものもある。逆に多く感じるのは、運転資金があまりかからないだろう理容店だけである。

老人が多いのも、この地域の特徴だ。道路を杖をついてゆっくりと歩く老人は目につくが、若者や子供はあまり見かけない。少子高齢化という日本の現状を現す言葉通りである。いわばジジババの町である。静かに滅びていくのを待っているという零囲気がただよっている。

引っ越し先に、新しい居酒屋の発見を期待していた。しかし、それはものの見事に当て外れとなつた。近辺を探訪してみたが、年配の女性が経営している居酒屋が一軒あつただけだった。

無理もないと思う。ここに住んでいる老人達が、居酒屋にたびたび行くとは思えないし、したがって商売として成り立たなかつたのだろう。

残念。

酒を飲むことが、長年の習慣になつている私にとって困つた環境である。いくら居酒屋が好きでも以前住んでいた都島区まで、そうそう飲みに行けない。必然的に部屋で飲むことが多くなつた。

健康にあまりよくないのを承知で、自分好みの食材だけをスーパーで買ってくる。食卓に並べて、テレビを見ながらダラダラと酒を飲む。テレビドラマなどに一喜一憂する。そのうちに、テレビの番組選択に大きな片寄りができていることに気がついた。

時代劇が多い。

地上波だけでなく、ケーブルテレビの時代劇専門チャンネルまで見ている。同チャンネル

ルは二十四時間、時代劇を放送している。過去の番組の再放送、再々放送であるが、飽きもせず、すっかりはまってしまった。

水戸黄門、鬼平犯科帳、大岡越前、桃太郎侍、遠山の金さん、暴れん坊将軍、剣客商売、必殺仕事人、銭形平次などである。

これが面白いし、何よりも酒によく合う。ストーリーは単純で、悪人に虐げられた弱い善人を、主人公の正義の味方が救う。勧善懲悪で、安心して見ることができるとは、何も考えなくてもいい。ドラマの結末は予定調和である。酒がいつそう旨くなる。

わかりやすさも抜群である。悪役は登場してきた時の顔でわかるし、喋り方も文字通りワルそのものである。

よくある場面にお代官様と悪徳商人の密談がある。

「商いの儲けを全て私のものにしていただければ、お代官様にも存分なお礼を」

「越後屋、お主も悪じやのう」

「お代官様も」

盃を片手に、にんまりと笑いあう二人。横には、明かりに照らされた千両箱が置かれて
いる。

それぞれの作品には、決まりきったお約束事と決めゼリフがあつて、これがまたいい。
そのいくつかを取り上げてみよう。

〈水戸黄門〉

諸国をめぐる黄門様御一行が、その地で悪事を重ねている奉行達に囲まれる。

「助さん、格さん、懲らしめてやりなさい」

黄門様の声で悪党達との乱闘が始まる。助さん、格さん、忍者姿のお銀、風車の弥七ら
の殴る蹴るが繰りひろげられる。おもむろに黄門様の声がかかる。

「もういいでしょう」

「静まれ、静まれ。この紋所が目に入らぬか。ここにおわします方をどなたとこころえる。
先の副將軍水戸光圀公であらせられるぞ。御老公の御前だ。頭が高い、控えおろう」

葵の印籠がこれでもかと突きつけられる。

〈遠山の金さん〉

北町奉行所のお白洲に引き据えられた浪人やヤクザ者を指さして可憐な町娘が叫ぶ。

「この人達がやったことは、全て遊び人の金さんが知っています」

「へえっ、遊び人の金さん、そんなやつはどこにいるんだ。いるんだったら、ここに連れ
てこい」

騒ぎたてる無法者達に、奉行の遠山金四郎が立ち上がる。長袴の片足を蹴りあげるよう
にして階段にかける。

「やかましい。北の白洲に咲いた遠山桜、よもや見忘れたとは言わせねえぜ」

ケレン味たっぷりの表情と動作で片肌脱ぎになると、肩から胸にかけて、いっぱい咲
き誇った桜の刺青が現れる。白洲に手をついて、がっくりと肩を落とした悪人達に裁きを
申しわたす。町娘に人情味のある言葉をかけてから、すっくと立ち上がる。遠方に目をや
って、高らかに宣言する。

「これにて一件落着」

〈暴れん坊将軍〉

座敷では、金糸銀糸に彩られた重厚な着物姿の大目付と太った商人が、我が世の春と美酒を呷っている。暗い庭先に光が射し込み將軍徳川吉宗が現れる。

「何者だ」

「主の顔も見忘れたか」

「上様」

庭に下りて平伏する大目付達。

「おまえらの悪行、しかと見とどけたぞ、恥を知れ。最後は武士らしく腹を切れ」

「ええい、ここに上様がいらっしやるはずがない。偽者だ、斬り捨てい」

顔を歪めて立ちあがった大目付の声で、侍や商人の用心棒達が現れる。やむを得ぬと吉宗は、葵の刻印の入った刀で、斬りかかる者達を峰打ちで倒す。いつの間にか飛び込んできた黒装束の男女のお庭番も乱闘に加わっている。

強い、強い。最後に親玉の大目付と商人だけが残される。吉宗が厳しく鋭い声を投げつける。

「成敗」

悪は滅びる。

よかった、よかった。拍手喝采である。酒が進み、酔いが全身にまわっていく。今夜はきつと熟睡することができるだろう。

ワンパターン。単純と言われれば、その通りであるが、それがいい。時には複雑で凝った時代劇もあるが、酒に合わない。酔って麻痺しかかっている頭でもわかるものもいい。

こうして、ひとり酒と時代劇を楽しむ日々が続いている。